

ファイト新聞 みんな笑顔に

避難所で子どもたち発刊

宮城県気仙沼市 明るい話題届ける

「新聞を書こう」きっかけは、友だちの一言でした。当時、宮城県気仙沼市の気仙沼小3年生だった小山里子さん(24)は軽い気持ちで誘いに乗り、一緒に記事を書き始めました。

それは、東日本大震災の発生から7日後のこと。避難者を元気づける「ファイト新聞」が誕生した瞬間でした。

学校は気仙沼港近くの丘の上にあります。校舎は当時、津波で住む場所を失った人たちが身を寄せる避難所でした。小山さんも津波で家を流され、家族と避難生活を送っていました。

震災直後、避難所は重たい空気に包まれていました。多くの人が家だけでなく、家族や仕事をなくしました。停電が続き、日が沈むと真っ暗。心に傷を負い、校舎の隅っこで涙

を流す大人もいました。地域の人たちの悲しみは、子どもたちにも伝わっていました。

大人たちを元気づけたい。小山さんたちは小さな手でペンを握り、立ち上がりました。編集方針は一つ

だけ。「暗い話題を書かない」です。創刊号(左ページ上)は黒と赤の鉛筆を使って書きました。大阪の人が豚汁を振る舞ってくれたこと、電気が復活したことを記事にしました。

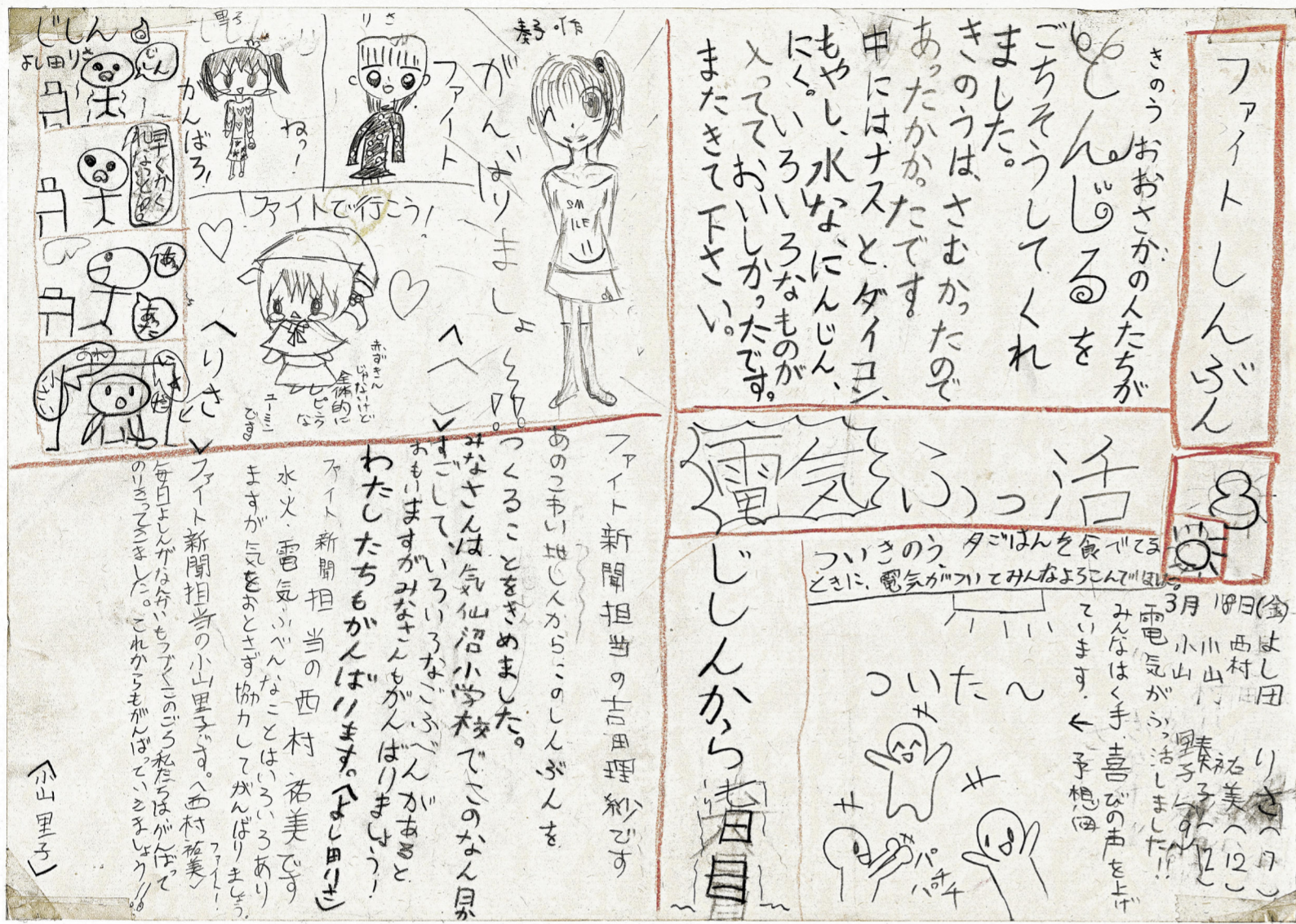
第2号(同下)からカラーペンも使いました。トップ記事の見出しは「ひなん生活はひまですわね!」。大人ならためらう内容も、子どもならではの自由な感性と表現で、笑顔をお届けしました。

7月までに計50号を発刊。小学生4人でスタートした活動は、最終的に小中高生12人まで増えました。小山さんは2代目編集長を務めました。

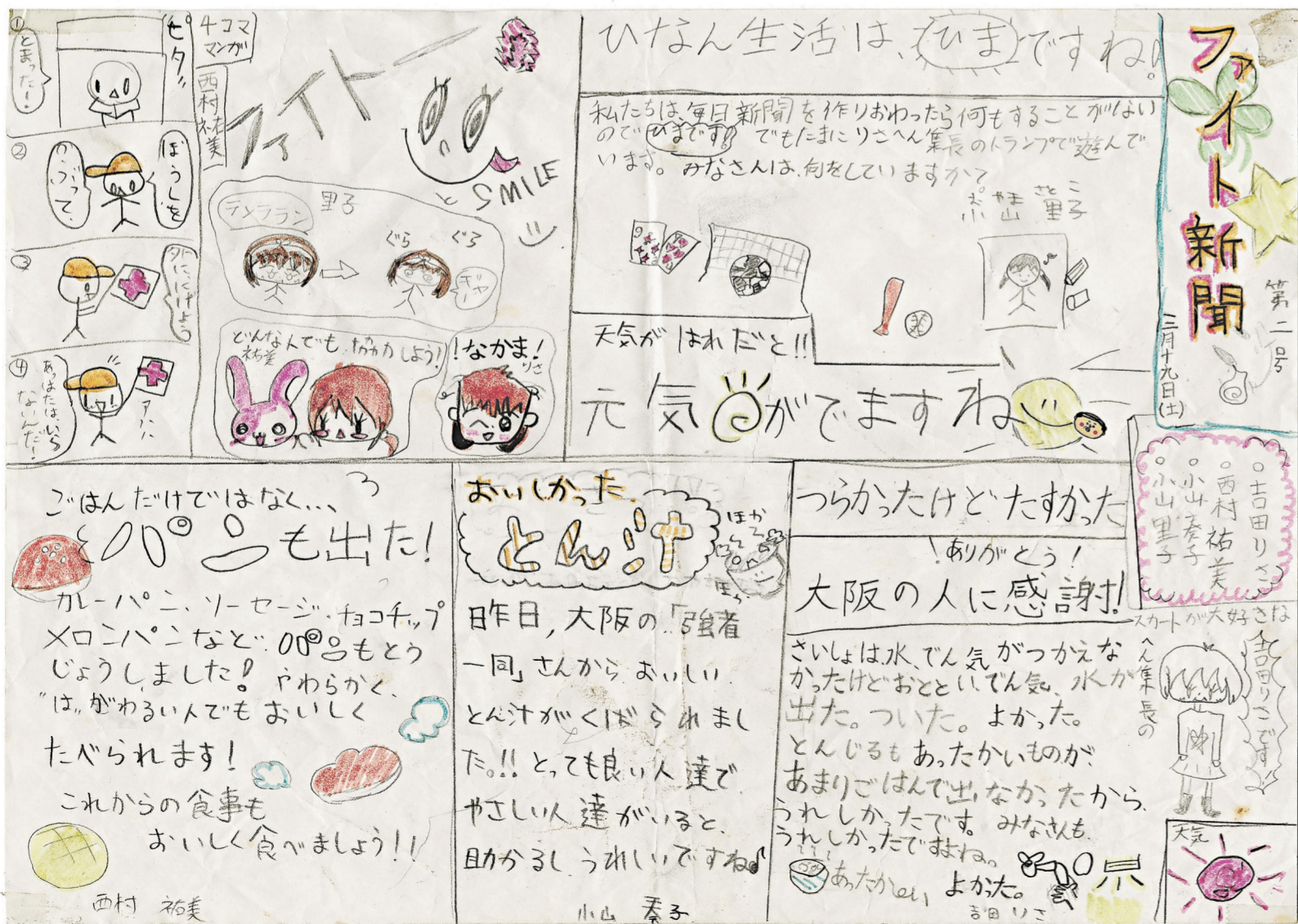
小山さんは高校卒業後、気仙沼市の水産加工販売会社に就職し、6年目です。「大人になると周囲の目を気にして動けないこともあります。子どもだからこそ、純粋にやりたいことをやれたのかな。子どもの力と、ペンの力で被災者を支えた自分たちの活動を振り返ります。



「ファイト新聞」の記事を書く子どもたち =2011年4月13日、気仙沼小



創刊号(左ページ上)は黒と赤の鉛筆を使って書きました。



第2号(同下)からカラーペンも使いました。

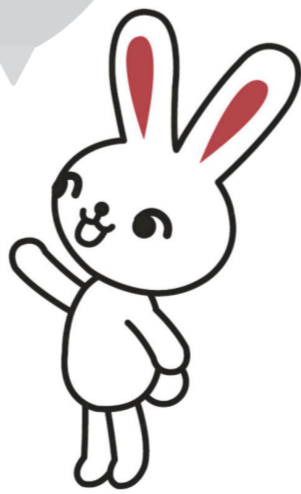


2代目編集長・小山さんから、子どもたちへ

ファイト新聞2代目編集長の小山里子さん(24)が、手書きメッセージを寄せてくれました。小山さんは小さい頃から文章を書くのが好きだったんだ

って。中学生の時には「少年の主張」でファイト新聞のことを書いて発表し、気仙沼市本吉地区大会で優秀賞を受賞したんだよ。

子どもたちが自分で考えて取り組んだ「ファイト新聞」は、国内外で大きな注目を浴びたんだ。国連教育科学文化機関(ユネスコ)のバリ本部で文化局長から顕彰されたり、小学校の教科書に載ったりしたこともあったよ。



今年で東日本大震災の発生から15年が経ちます。当時、小学3年生だった私は、もうすぐ社会人7年目を迎えます。津波で家を流され、自分の通っていた小学校に避難していた私は、震災から1週間が経った頃、同じ小学校に避難していた当時小学1年生だった吉田理紗ちゃんから「一緒に新聞を書こう」と声をかけられ、ファイト新聞を書くことになりました。最初は、周りの暗い顔をしている大人たちを元気づけるために書き始めましたが、毎日友達と集まって書き続けていくうちに自分たちの心の拠り所にもなってきました。新聞を書く上でみんな決めたルールが、「暗い話題を書かない」というものでした。当時、テレビや新聞の情報は甚大な被害の様子や、死者・行方不明者の数など、毎日暗いニュースばかり飛び込んでくるので、自分たちは一変して避難生活の中での楽しかった出来事などを記事にしました。すると、読んでくれた方々から「面白かったよ。明日も楽しみにしてるね。」などと声をかけられるようになり、段々と大人たちの表情も明るくなっていくのを実感しました。ほげのうちは、本当に自分たちが周りを元気づけることができるのか不安でしたが、今になりあの時ファイト新聞を書いたよかったです。やらない後悔も、やっただけ成功! 結果はいいに気をつけて一歩踏み出さないと、自分にはないことと、ファイト新聞を通して学びました。また、震災はつらい経験ではありますが、全国からたくさんの方々が力を貸してくれました。これからは先人の人生で困難に直面しても、「自分にはとれないけれど、他人の力を受けたい」と思えるように、あの時のことを知らない人たちにも、風化させないように、引き続きしていきたいと思っています。

小山 里子